
図書部。

紫御寺 棟蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書部。

【Nコード】

N2156Z

【作者名】

紫御寺 棟蛇

【あらすじ】

「第二図書室」と看板を掲げた一室。そこは、「文芸部」でも「漫画研究会」でもない「図書部」の部室だった…。

入学早々入部する主人公と、我が侘な美少女やら温和な上級生、権力全く無しの顧問やらによる、ちよつとした物語。

連作短編みたいな感じですよ。あと一話一話が短くなると思います。

第一話 第二図書室。 第三…はありませんよ!?

彼 かれまよすが 枯間縁が、入部した「図書部」なる部活は、実に珍妙なものであった。

縁が体験入部で、

「あの、普通なら、本を読んだりする部活って、文芸部、とかですよ。何で図書部なんですか？」

と、部活動の名称に疑問を持ち、上級生と思われる少女に問いかけを試みる。すると、その少女は、

「文芸だと漫画が読めないでしょっ、そんなこともわかんないの？ 全く最近の鈍い高校生は…」

とあからさまに不機嫌な態度で答えた。

そこに、彼女の隣に座り書物 こっちはちゃんと小説のようだ を読んでいた少年は、彼女の言葉を訂正する。

「図書部はね、去年俺たちが立ち上げた部活で、色んなジャンルの本を読めるように、文芸部じゃなくて図書部にしたんだ。まあ、ほとんどコイツの我が俣で立ち上がったような部活だけだね」

話終えた彼はハハ、と笑い、手に持っている本に再び目を落とす。

縁が、少し納得したように呆けていると、先ほどの不機嫌な少女が脅すような声で言う。

「で、入部するの!?!しないの!?!無断に口動かす力消費させないで!」

ものすごい剣幕で彼女がまくしたてている間、縁は、面白そくないことはなさそうだなあ、とそう思ってしまう。

何故なら、自分が気付くと笑っていて、彼女の隣で読書をしている彼も楽しそうに笑っていて、「第二図書室」と名づけられたこの部屋が、とても楽しかったから。

第一話 第二図書室。 第三…はありませんよ!?(後書き)

どうも、紫御寺しおんじ 棟蛇かがしと申します。

今回は、長編だと大変だということ、連作短編的な感じでやっつていこうと思います。しかも、一話一話が500〜1000文字程度と、短くなると思います。

楽しんで読んでいただけたら幸いです。

第二話 権力皆無顧問。

入部した次の日、縁が部室に向かうと、一人の男が、ドア正面の席に腰掛けて眠っていた。服装から、学生ではないと予想される。机に突っ伏したまま熟睡していて、時々窮屈そうに身体をつねらせている。

そんな彼を不審に思い、肩を優しく叩いてみる。

「あの〜…」

「……………」

トントン、ともう一度叩いてみる。

「ん…ぬう……」

起きない。

もう一度叩こうかと手を伸ばした瞬間、部室の出入り口の扉が開いた。

「あ、もう来てたの。まあ、初日にしてはいい出来じゃない」

部室に入ってきたのは、二年の紅野紅目と、若葉蛙わかばけいだった。

紅野紅目は、この図書部の部長で、何か名前の通り、紅い髪と目をしている。それで、ものすごく我が侂わがごうであるらしい。

一方の若葉蛙は、爽やかな感じで、明るい蒼の髪。副部長で、紅眼の友人であるようだった。

「あ、篝先生も来てる」

「あんなの先生なんて呼べないっての」

蛙は、机に突っ伏して熟睡している男を見るなり、近寄っていった。

篝先生？と縁が首を傾げていると、紅眼はその疑問に答えた。

「ろくに授業しないでここに寝てる教師よ。図書部の顧問だから、一応」

一応、という言葉を妙に強調している。

「ぬあアあ!？」

次の瞬間、半ば叫ぶような声が聞こえ、縁がその方向を向くと、起き上がった篤と、半笑いの蛙が見えた。

「え…と?」

困惑する縁。

蛙が状況を説明してみせる。

「一度寝ると中々起きないんだよ、篤先生は。で、“タオル”って言うと起きるの」

「何でタオル?」

縁が、何故そこで使われるのか全く理解できない単語について問う。

その問いに対して、蛙は苦笑いで答える。

「部を立ち上げるために、顧問が必要だ、ってなってその時にちよつと…」

完全に目を覚ましたらしく、篤は話に口を挟んでくる。

「この女、俺がここで寝てたらいきなり猿ぐつわ噛ませたりタオルで手足縛ったり目隠してきたんだ!新入部員か知らねえけど、こんな部活入らないほうがいい!」

「…要は、紅野先輩が、脅して強制的に顧問にしたってことですか?」

縁の言葉に紅眼は少し声を荒げて反論する。

「脅してはないし、強制的でもないわよ。ただちよつとタオル五本くらい使って説得したただけであって…」

その言葉を聞いた瞬間、縁は、この人には逆らっちゃいけないな、と本能的に察したという。

「全く…唯一ゆっくり寝れる場所だったのになあ」

篤が紅眼を睨みつけながら言う。

「はあっ!?今でも十分寝てるでしょっ!?!」

再び口論を始める二人。

埒が明かない、と呆れた様子で蛙が止めにかかる。

数分後。

汚い言葉で罵り合っていた二人は疲れたのか、互いに違う方向を向いて座っている。

そこで、蛙は縁に紹介する。

「改めて紹介するよ。この人は篝先生といって、図書部の顧問。まあ覚えなくても損しないけど、可哀想だし、時々構ってあげた方がいいかな？」

ひどい言い様だった。

ひでえな、と言いなながらも、紹介に対し、本人もこちらを向いて手を差し出してくる。

「よろしく。縁だっけか？俺はフルネームで篝狗竜かがりくりゅうって言うんだ」

「よろしく、お願いします」

一応丁寧に挨拶する縁に、紅眼は言う。

「新入り、そんなヤツには敬語使わなくていいから」

その言葉を発端に、二人はまた口論を開始するのだが、それはまた別に話である。というか、ただ単に、カット、というやつである。

第二話 権力皆無顧問。(後書き)

駄文失礼致しました。

楽しんでいただけたでしょうか。

一話約500〜1000文字程度と表記していますが、もうちょっと長いものが書けそうです。

来週の週末までには、次の話が投稿できると思いますので、良かったらお付き合ってくださいませ。

紫御寺棟蛇でした。

第三話 活動日誌がどこのどこのな件。

「今日から、活動日誌つけるわよ！」

放課後、縁が部室で一番最初に聞いた言葉だった。

紅眼の向かいに座って書物 今日挿絵から察してライトノベルだろう を読んでいた蛙は顔を上げ、活動日誌について賛同する。

「それはいいかもしれないな。振り返ってみたりできるし、色んな意味で楽しくなりそうだし」

色んな意味って何よ…と呟きつつ、そうそう、といった調子で紅眼はブンブンと頷く。

「まあ、新入りの意見とアホ顧問の意見はどつでもいいとして、私が見せるから」

紅眼は自身の黒い鞆から一冊のノートとシンプルなデザインの手箱を取り出す。筆箱からシャーペンと消しゴムを取り出すと、いそいそと書き込み始めた。

4月10日 記録者：紅野紅眼

私が部室に入ると、某アホ教師がエロ本を開き鼻血を垂らしたまま熟睡していた。

「やめろおおおおおおお！？」

いつの間にか起きていたのか、狗竜がそこにいて叫んでいた。

「は？事実だからいいじゃない」

やたら鬱陶しそうに紅眼が不機嫌な声を上げる。

「いやいやいやいや、寝てたのは事実だが変な本は読んでねえ！」
「じゃあ書き直してあげよつか。か・わ・い・そ・うだし」
「かわいそう、を強調しながら紅眼はノートの内容を半分ほど消し、書き直す。」

私が部室に入ると、某アホ教師が、表紙に、密着！！貧乳24時！と書かれたいかがわしい本を開き、鼻血を垂らしたまま熟睡していた。いくら図書部顧問だからといって、アダルトな本はどうかと思う。そもそも、いかがわしい本を学校で読むということがどうかしている。教師としてどうなのだろう。よし、あとで校長先生に

「なああああああああ！？」

再び叫びだす狗竜。

「ちゃんと詳しく書き直してあげたのに、まだ不満??？」

「不満だ不満だ不満だ不満すぎる！！そもそもえっちな本なんて読んでねえんだよ！」

狗竜が紅眼の消しゴムをひったくろうとする。

が、紅眼は消しゴムを机からひよい、と取り上げ、

「私の物に触れんな！！この変態じじい！」

「な！？せんせーに向かつてなんだとお！？？」

「学校でアレ読んでるやつなんてすでに先生じゃないから！」

「だから、読んでねえ！！！」

ああだこうだと二人が争う隙に、埒が明かない、といった様子で蛙が活動日誌のノートを取り上げて言う。

「二人ともくだらないことやってないでちゃんと活動しようか??？」

蛙は顔に笑みを浮かべながらそう言ったが、目が笑っていない。

それに対し、狗竜も乗っかる。

「そつだそつだ！お前も部長なんだからしつかり部員に手本見せる全く……」

「はぁ？ならあんたも顧問らしくしなさいよ！」

再び争いを始める二人であったが、横からの蛙の視線に気づき、静まる。

紅眼はノートに書いてあった文章を消し、ページをただ見つめている。

狗竜が、

「蛙のおかげで首の皮が繋がった！ありがたい！」

と、蛙の肩に手を置こうとするのだが、彼はさっと避け、

「気安く触らないでください、変態教師めが」

と笑いながらさらっと言っただけで、恐るべし若葉蛙。

「ううああああああああ！！」

よほどショックだったのか、篤先生は発狂しました。

数分後。

縁は何気なく部室内を見渡してみる。

紅眼は何を書いたのか思い至ったようで、ノートに筆を走らせている。

蛙は読書を再開して、ページをパラパラとめくっている。

狗竜は、部室の隅で体育座りをしてしくしくと泣いている。

縁は狗竜の姿を見て少し笑いそうになってしまいが堪え、彼を指差し、蛙に問う。

「あれ、どうしますか？」

「大丈夫。構えば調子に乗るからあのままでいいよ」

その蛙の言葉が聞こえたのか、狗竜のいる方向から「うううー」と嗚咽のようなものが聞こえてきた。

その時、紅眼は顔をあげ、見て見て、とノートを差し出してくる。縁と蛙はそれを覗き込む。

4月10日 記録者：紅野紅眼

今日は、楽しい活動だった。

思い返してみれば、あの四人との部活は楽しかったなあ…。

いつもくだらない話題で盛り上がったたり、小説のキャラ貶したり、顧問いじめたり…。

ああ、もう人生に後悔は無いよ。

みんな、ありがとう。

私の分までちゃんと人生楽しんでくれよ。

b y あなたの後ろにいる誰か

「どう？面白いでしょ？？」

「全然。というか感動とともに怖いねこれ」

その言葉を聞いて紅眼は少し怒りの色を浮かべるが、縁のほうを向き直って聞いてくる。

「縁はどう思う？？」

「ふざけてるとしかおもえなごぶっ」

縁が殴られました。

「私の作品のよさがわからないなんてまだまだ子供ねえ」

二人は力チンとこないでもなかったが、紅眼より大人なので堪えた。

「というか、さっき言われたことまだ懲りてないのか…」

微笑をたたえながら蛙は言う。あきらかに顔がピクピクしちゃっている。

「す、すみません」

その後、何度書き直させても懲りずに紅眼がふざけたクオリティ

のものを作ったため、蛙が初日の日誌当番を担当したという。

4月10日 記録者：若葉蛙

いつも通り。

…。

…。

書くこと特に無いなあ。どうしよう。

何かこの日誌、三日坊主的な感じですぐ終わりそうな気がしてならない。

縁…だっけ？はたぶん大丈夫だろうけど、紅眼がサボりそうって
いうか、さんざんサボった拳句、面倒くさいからやめよう、なんて
言い出しそうなんだよなあ…。

まあ、そうなったら俺が無理やりでもやらせるけどね（笑）

ちょっと日誌じゃなくて日記みたいになっちゃったけど、こんな
感じでいいのかな？

じゃあ、今日はこの辺で。

第三話 活動日誌がどうのこうのな件。(後書き)

どうも、紫御寺 棟蛇です。

なんか、宣言した量の二倍です。他の方の作品と比べると短いですがね(笑)。

ということ、毎回(多分)活動日誌が載ると思います。

紅眼が飽きる前に、自分が飽きそうです。

四話は多分来週末までにはお届けできるかなあ、と思いますので、お付き合いいただけたら、踊って喜びます。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2156z/>

図書部。

2011年12月11日18時57分発行